

就職先アンケート報告（抜粋）

1. 報告要旨

本報告は、本学卒業生の就職先企業に対して実施した「2022 年度 清泉女子大学 教育についてのアンケート」（以下「就職先アンケート」もしくは「本調査」）をもとに、企業による評価を通じて卒業生の「学び」の達成を確認するとともに、企業における採用時の重視項目および採用時に参考にする可能性のある学修情報を確認し、今後の本学における学修成果やその可視化、すなわちディプロマサプリメントの改善の参考とするものである。なお就職先アンケートは、のべ 670 社の採用担当者を対象に 2023 年 1 月 7 日～1 月 31 日まで Google Form を用いて実施し、のべ 173 社より回答を得た。

2. 結果

2.1. 企業からの卒業生の評価

本学の卒業認定・学位授与の方針（以下 DP）は文学部 DP と学科 DP の 2 つが定められており、文学部 DP についてはすべての卒業生が満たすべきものとして設けられている（表 2-1）。

表 1：清泉女子大学 文学部 DP(2020 年度以前)

清泉女子大学文学部は、本学に所定の年限在籍し所定の単位を修得し、次のような知識、技能、態度、資質を備えた学生に対して卒業を認め、学士の学位を授与する。

- (1) 豊かな教養と専門領域の学芸を修得している。
- (2) 建学の精神であるキリスト教ヒューマニズムを理解し、他者を思いやる人間性を持ち、奉仕的精神を持って行動できる。
- (3) 複雑な事象を前にしても、問題の根源にさかのぼって論理的に思考を重ね、解決を目指すことができる。
- (4) 言語等によるコミュニケーションの能力を備え、多様な立場や考え方が交錯する中でも対話を続ける姿勢を保つことができる。
- (5) 文化の多様性を理解し、個々の文化の個性を尊重し、国際社会の中で活躍するための基本的な資質を備えている。
- (6) 常に学ぶ態度を忘れず、知識を広め教養を深めて、自分を豊かにしていくことができる。

図 1 は、就職先企業が今までに採用した本学の卒業生について、上記 DP の各項目が達成されていたと思うかどうかを尋ねた結果である。いずれの DP においても「達成できていたと思う」と答えた企業が 60%を超えており、卒業生はおおむね本学の文学部 DP を達成していると評価されていると考えられる。

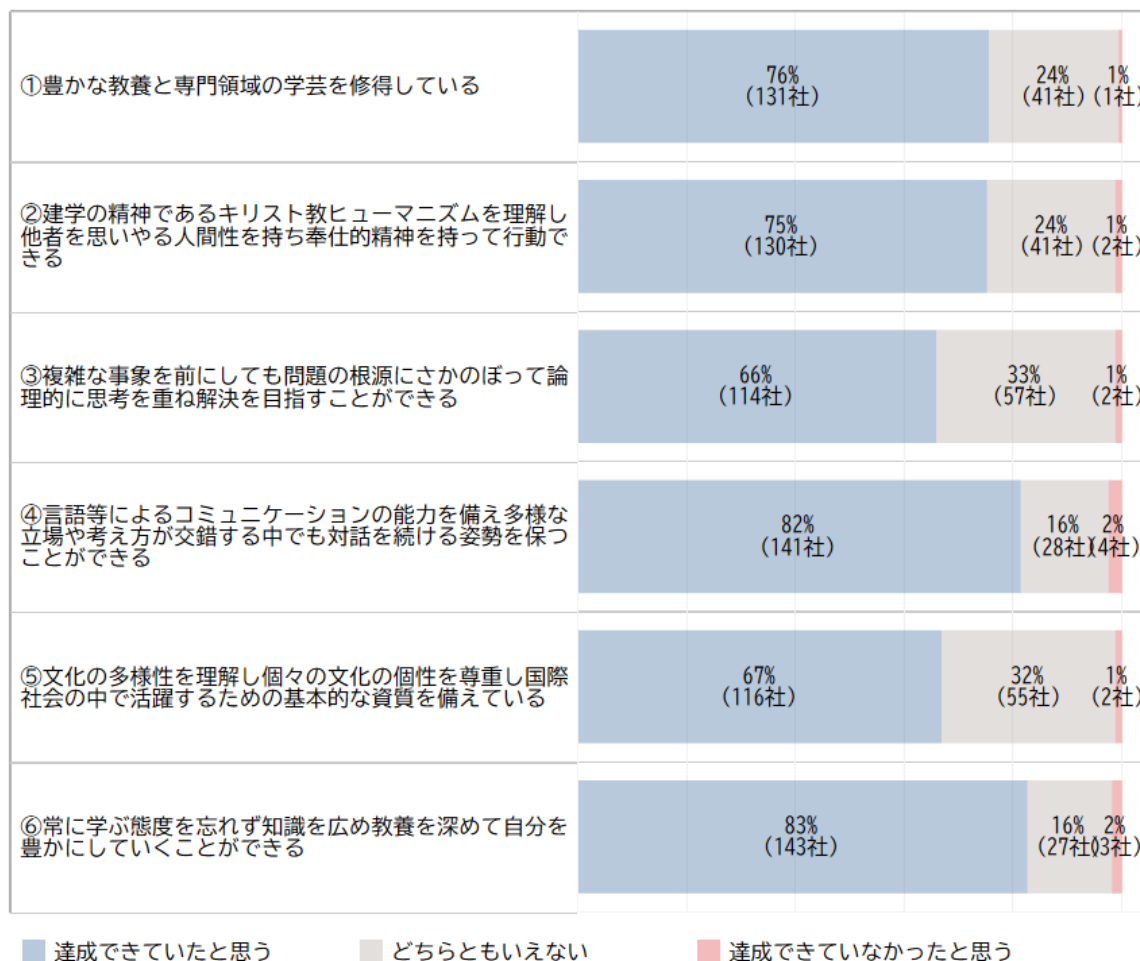


図 1：企業側からみた本学卒業生の DP 達成評価

2.2. 企業における採用時の重視項目

図 2 は、企業が学生を採用する際に各項目をどの程度重視するかを尋ねた結果である。

重視する企業がとくに多いのは、「重視する」の割合が多い順に「8.相手の立場や意図・関係性・状況を考えながら相手の話を聞き、理解する力(87%)」「10.相手の立場や意図・関係性・状況を考えて相手に伝わるように話す力(84%)」「12.失敗しても諦めずに努力を続ける力(82%)」「11.意見の異なる相手とも関係を保ち、対話を続ける力(76%)」「13.必要なスキルを自発的に獲得しようとする態度(76%)」であった。これらの項目は、ほぼすべての企業が「重視する」「どちらかといえば重視する」と回答していた。「重視しない」「どちらかといえば重視しない」の割合が多かったのは「3.外国語を使う力(76%)」「4.統計やデータサイエンスの知識・スキル(47%)」であった。これらの専門的な知識や能力は、採用においてはあまり重視されていないといえる。一方、「1.大学での一般教養・専門分野で学んだ知識・理解」や「2.大学における学びの経験」については「どちらかといえば重視する」と答えた企業の割合が多く、採用においては補助的に参照されていると考えられる。

表 2 は各項目の「重視しない～重視する」という回答を 0 から 3 の数値に変換し、企業の業種別に平均を算出したうえで、平均値の大小によって白から青のグラデーションに塗り分けたものである。どの業種であっても「8.相手の立場や意図・関係性・状況を考えながら相手の話を聞き、理解する力」「10.相

手の立場や意図・関係性・状況を考えて相手に伝わるように話す力」「11.意見の異なる相手とも関係を保ち、対話を続ける力」「12.失敗しても諦めずに努力を続ける力」「13.必要なスキルを自発的に獲得しようとする態度」はスコアが高かった。「2.大学における学びの経験（PBL・ゼミ活動・留学など）」についても、業種を問わずほぼ一定のスコアであった。一方、「1.大学での一般教養・専門分野で学んだ知識・理解」については業種によりスコアの高低がみられた。「7.文献・資料・数量データを読んで理解する力」「9.構造のある論理的な文章を書く力」についても同様であり、業種によって求められる力が異なると考えられる。

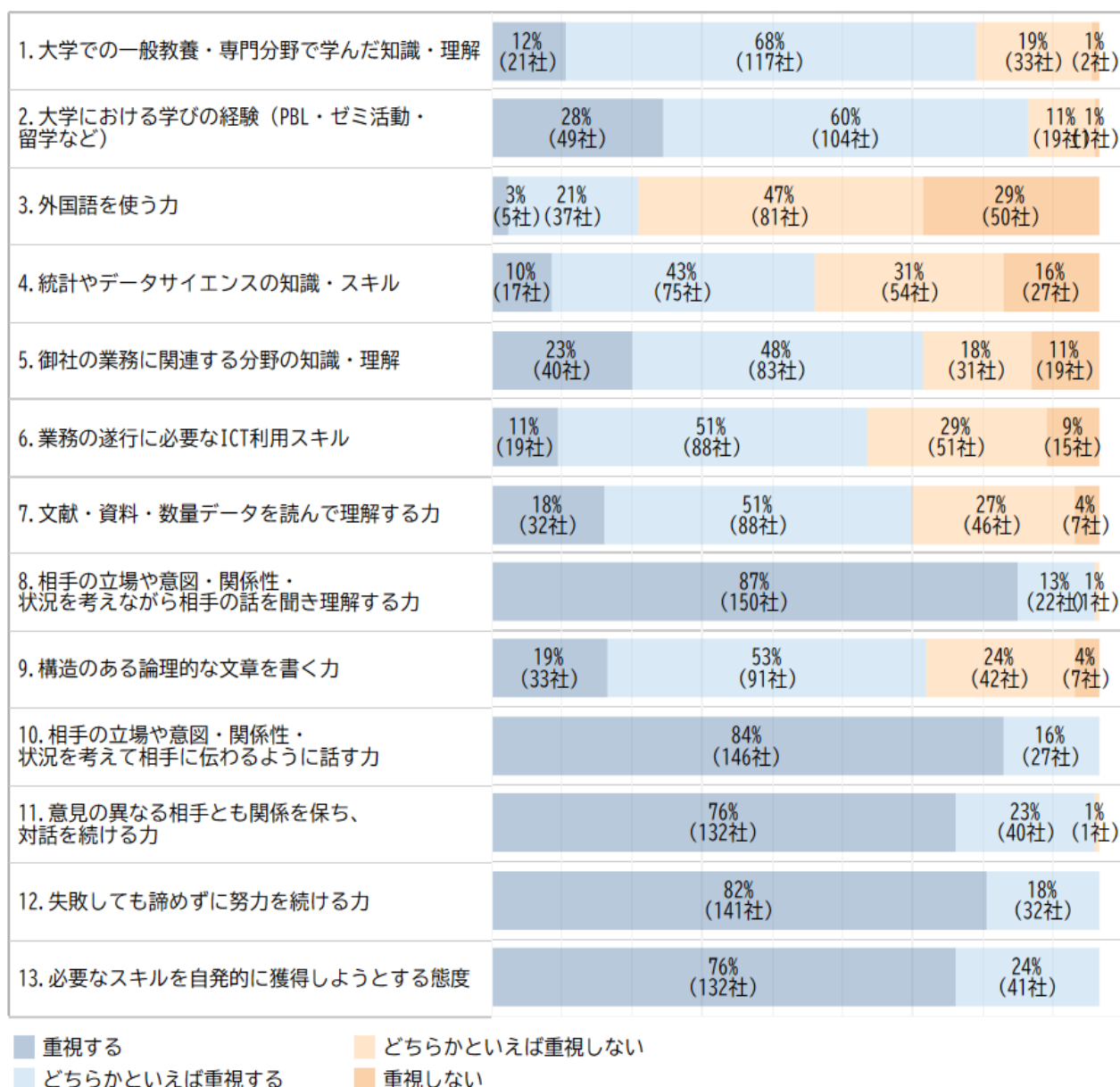


図 2：採用時における重視度

以上